

『自然と人生』——構成の意図——

布川 純子

一、発表

徳富蘆花の代表作であり、出世作となった『自然と人生』は、『不如帰』と同じ明治三十三年八月に民友社から刊行された。

『自然と人生』は巻頭に小説「灰燼」を置き、その後に随想集の「自然に対する五分時」「写生帳」「湘南雑筆」を並べ、最後に評論「風景画家コロオ」を置く五部構成となっている。これらの文章は、新たに執筆されたものもあるが、すでに「国民新聞」などに発表したものもかなり含まれている。各章の詳細はすでに拙稿^{（註）}で論じてきた。今回は蘆花が、五章をどのような意図を持って一冊の書にまとめたのか、全体の構成から考えてみたい。

そこでまず『自然と人生』の成立事情について、彼の記述をもとにしながらどってみよう。

二、『自然と人生』成立事情

明治二十二年、蘆花二十一歳の時、熊本から上京、兄の設立した民友社に入社した。記者として「国民之友」「国民新聞」

に発表する翻訳、翻案、評論などの文章を書いていた。

二十六年一月上州に旅行した。この時見た自然を文章にし、「碓氷の紅葉」「妙義山」と題して「国民新聞」に発表した。^{（註）}この頃から自然探訪の旅行が多くなり、自然をスケッチした。

二十七年五月五日、原田愛子と結婚。九月、蘆花は妻に、「美なる日本」が自分の書きたいと思う一つである。これは兄の発案が元になっている。また「写真帖」というものも書きたい。「写真帖」は自分が思いついたもので「わが眼に見心にとめた人と物との描写」であると語った（『富士』第一巻第九章（二））。この頃から『自然と人生』のようなものを書きたいという構想が強まったと見ていいだろう。

二十八年夏、志賀重昂（矧川）の『日本風景論』を読み、「何時かは書かうと思ふた「美なる日本」が、先鞭を他に着けられた。然し彼に日本風景論者程の科学の素養はなくも、日本風景の真美を味得し發揮するに於て、日本風景論は唯陳呉に過ぎぬと思ふを禁じ得なかつた」（『富士』第一巻第二十章（二））と記している。志賀に先は越されたが、自

分の考えている「美なる日本」は『日本風景論』とは趣きが異なると考えている。

二九年冬、逗子^{まゆこ}で国木田独歩が富士の朝景色の美を称へた。「日光が富士の一角に初めて触る、利那の美」を語つた。「チヨ、チヨツトかゝる時です」と独歩は「恍惚とした眼ざし」(『富士』第一卷第二十二章(其一)〜(一))で語つたという。同じ民友社で働く国木田独歩が指摘した「日光が富士の一角に初めて触る、利那の美」に示唆を受けて、蘆花が書いたのが「この頃の富士の曙」(明治三十一年一月二五日「国民新聞」)である。この文章は「自然に対する五分時」の冒頭を飾つた。四月二日「国民新聞」に「百物語(六) 哀音」を掲載。「哀音」は人生の全体を通して感じられるような哀しみを描いており、これに加筆したものを「写生帳」冒頭に「哀音」として置いた。

三〇年九月一〇日「無声詩人《画家コロオ》を『国民之友』雑録欄^雑に掲載。その後「風景画家コロオ」と改題加筆の上、『自然と人生』巻末に置いた。

三一年夏、『不如帰』執筆のきつかけとなる話を聞く。「夏の盛りで宿^{しゆく}が満杯のため、途方に暮れていた子連れの婦人に一間用立てたことがあった。蘆花夫妻と親しくなったその婦人が、愛子夫人との雑談の中である話を語つた。それは新婚まもなく肺病になつたため婚家から離縁されてし

まった、若い婦人の悲話だつた。若い婦人は死に際に『もう二度と女になんか生まれはしない』と言い残した。傍らで聞くともなしに聞いていた蘆花は「自分の脊髄もあるものが雷のごとく走つた」。同様の内容を『不如帰』第百版の巻首(岩波文庫巻首)や『富士』(第二卷第十一章(二))に記している。

三一年一月二九日から三二年五月二四日まで、『不如帰』を「国民新聞」に連載し評判となる。

三二年一月一日「元旦」を書き、後に「湘南雑筆」冒頭に置いた。「湘南雑筆」は三二年一年間の逗子における自然を描いた(各編文末に期日が記入されている)ものがほとんどである。

三二年二月「灰燼」の執筆を始める。「師走に入つて、『不如帰』の校正がぼつ／＼郵便で来た。(略)校正の傍、熊次(蘆花)は新年の新聞にのせる短編の小説を書いた。題は『灰燼』であつた。(略)『灰燼』の原稿を社に送ると、やがて『不如帰』の校正も終へた。而して明治三十二年は静かに相模の海辺に暮れた」(『富士』第二卷第十六章(二))。後にこの作品が『自然と人生』の巻頭を飾つた。

三三年一月一日、新聞連載の文章を大幅に改訂して『不如帰』を民友社から刊行した。

三三年八月一八日、『自然と人生』を民友社より刊行した。

三、内容

それでは、次に五つの章がどのような内容かを簡単に紹介する。

①「灰燼」

私利私欲から、愛する家族でさえも犠牲にして家を守る冷酷な人間が、最後には家まで灰燼となることで天の裁可が下されたという短編小説である。

執筆動機にもなった素材について『富士』で次のように記している。「熊本の東南郊外二里に一の小村がある。高原を後に、田圃を前に、藻の多い川を帯びた静かな村である。沼山先生（横井小楠）晩年の棲遅も其所であった。明治十年の西郷戦争の初期に、熊本城の天主に火がかゝるを見つ、十歳の熊次（蘆花）が母や姉達と兵乱を避けたも其村であつた。草鞋脚絆に長刀、鉄砲担いで西郷軍に加担の郷士の子弟の一群が出かけて行く中から浅葱木綿の装束した一人が避難の宿の主に告別に立寄るを、二階から恐々熊次が眺めて居たものだ。此村のYといふ士族の家の次男が所謂賊軍に加はつて、後でひそかに逃げ帰つた。わが家に乱臣を出しては済まぬと彼は腹を切らされた。彼は母に絶つた。然し母も父兄に異を云へなかつた。「阿母、あなたも！」を最後の一語に、彼は腹を切つて了ふた。熊次は何

時此話を聞いたか、はつきり記憶せぬ。然し「Brutus 卿も？」とシイザアの一語にまして、不幸な子の一言は熊次の腸を刺つた。頭にくつ、いてはなれなかつた。一度は書かねば気が済まなかつた。そこで今の機会に書いた。熊次はY家の事について少しも知らなかつた。勿論其家も、其家の人も見なかつた。そこで切腹の事実と、最後の一言を基礎に、舞台を未だ知らぬ豊後の中津に移して、全くの小説を結構した。中風の父も、弱い母の発狂も、愚かな長兄も、剛気の仲兄も、縊れて死ぬる主人公の恋人も、乃至すべてを「灰燼」にしてしまふ其家の火事も、すべて空想の産物であつた」（『富士』第二卷第十六章（二））。

中野好夫氏の調査によれば、Y家とは沼山津村の郷士弥富家のことで、西郷軍に加わつた次男直次郎二七歳が、私怨から上官を射殺してしまつた。その後次男は家に戻つたが、不始末を起こした息子に對し家族が切腹を迫り、次男は自害したという事件が實際にあつたようだ。

蘆花はこの話を当時沼山津東の広安村安永に住んでいた実姉山川常子から恐らく聞いていたのではないかと思われる。それをなぜ二〇年近く経過してから小説にしようとしたか。前述したように「灰燼」執筆と『不如帰』の加筆が平行して行われていたことが関連しているのではないか。

『不如帰』は「もう二度と女になんか生まれてこない」

といつて死んでいく浪子の人生が描かれている。一方、「灰燼」ではお家大事で家族から切腹を迫られた時、「阿母、あなたも！」の言葉を残して自害する三男茂の人生が描かれている。共に家を守るといふ大義名分の前に犠牲を強いられている。家の犠牲になる浪子を書いている時、もつと過酷な形で犠牲を強いられていた青年の話が改めて蘆花の脳裏に蘇つたのではないだろうか。

では、茂を死に追いやつたものは何か。一つには次男猛の私利私欲である。両親に可愛がられていた弟に嫉妬し、弟の恋人に横恋慕し、猛は弟のことを邪魔に思っていた。弟が逃げ帰つて来たとき、家名を守るため致し方ないと、猛は大義名分をもつて両親を説得してしまう。しかし、実は自分の利己のためであった。二つには、茂の命を助けるより、罪人を出したことで自分も巡査に連れて行かれることを恐れ、息子に犠牲を迫つた親たちの保身である。三つには家名を守ることが命より大事であるといふ大義名分が通つてしまつたことである。

しかし、息子の命までも犠牲にして守つた家名は、世間からは「金満家は嫌な者、子がもどつても庇ふ道は知らず、腹切らせて自分ばかり安閑として居る」と批難されてしまつた。冷酷な行動を正当化しようとしたが、それらが通用しないことを悟つた父は病に倒れ、母は精神に異常をき

たしてしまつた。蘆花はこうした人間を抑圧し破壊する物欲や財産欲、保身、家制度といったものを批判している。

一方、こうした醜い世界と反対に、恋人菊は清らかで潔い姿として描かれている。猛の求婚にも応じず、茂と結ばれることを一縷の望みとしていたが、茂が亡くなつた後、茂を追つて自害する。また、茂の財産に見向きもしない無欲さ、自由民権を尊ぶ一途さなども肯定的に描いている。

最後の「空想の産物」である火事の場面は、母の過失で起きた。茂の命を犠牲にしてまで猛が望んだ財産は全て無に帰してしまつた。これは、人間の非情さを否定し、罰とする意図をもつて語り手が設定したものだらう。不自然なものがすべて灰になつた後には、「八重律ほしさま態に生ひ茂りて、昼も虫の音滋く、燃えざしの老楠の株のみ今も其のまゝに残れり。」(下の四)と、自然を描写して終わっている。ここには人間の世界がいかに醜悪であろうとも、自然は変わらないことを示している。

② 「自然に対する五分時」

二九編のさまざまな自然描写が描かれた随想集で、自然の中に人生の指針や神の存在を見出そうとした。

人生の指針ということでは、例えば「朝霜」では「余は霜を愛す。其の凜として潔きが為に、其牢晴を報ずるが為に」とあり、凜とした潔い生き方への賞賛が見られる。「粟」

では「栗は野人なり。木膚も葉もさがさとして如何にも木訥に、如何に巧言令色を嫌へばとて、毬の逆茂木、厚皮の鏡、猶其上に汚染の鏡下までつけて、奥深く甘き心を秘するは余りならずや。然も余は栗を愛するなり」として、真実や優しさを含みながら表面は木訥で虚栄のない人生を礼賛している。

自然の背後に神を見出すということでは、例えば「相模灘の落日」では「其る風の夕に、落日を見る身は、恰も大聖の臨終に待するの感あり。莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて、肉融け、靈独り端然として永遠の浜に佇むを覚ゆ。」とあり、太陽の落日を一人の偉大な聖人の臨終の姿のように見ている。「大海の日出」で太陽が昇る様子を「海神が手もて捧ぐるまゝに」と表現した。ここにも背後の神を想定しているように思われる。

冒頭の「自然に対する五分時」では刻々と変化する自然を色彩で表現したところが評判になった。例えば、「この頃の富士の曙」では、富士山が今まさに夜の眠りから目覚める様子を「唯一抹、薔薇色の光あり。富士の頂を距る弓杖許りにして、横に棚引く。寒を忍びて、暫く立ちて見よ。諸君は其薔薇色の光の、一秒一秒富士の頂に向つて這ひ下るを認む可し。丈、五尺、三尺、尺、而して寸。富士は今眠より醒めんとするなり。今醒めぬ。見よ、嶺の東の一角、

薔薇色になりしを。請ふ瞬かすして見よ。今富士の頂にか、りし紅霞は、見るが内に富士の暁、闇を追ひ下し行くなり。一分、——二分、——肩——胸、見よ、天辺に立つ珊瑚の富士を。桃色に匂ふ雪の膚、山は透き徹らむとするなり」という調子で描写していった。

③「写生帖」

一一編の小品集。自然中心の文章は三編で、残り八編は人物を主眼としてまとめられており、小説の習作的なものもある。

人物を主眼としたものは、社会の底辺にいろよな貧乏な人たちが、男中心の世の中で虐げられている女性や子供に、焦点をあてている所が目立つ。例えば「可憐児」では子爵の夫に虐げられ自殺する妻と遺児の姿を描いた。「海運橋」では夫の家出、家賃の滞納で家を追い出され、立派な銀行を背に橋の上で途方にくれる母と子供の姿を描いた。「国家と個人」では戦争に勝っても貧乏な者には関係ないと抗議する立ちん坊の姿を描いた。こうした弱者への同情、権力者への反発批判は、後の『不如帰』や『黒潮』などにつながっていく。

④「湘南雜筆」

返子の一年の四季の移り変わりを、歳時記風に構成した四七編からなる随想集。自然と人生を融合的に捉えている。

自然描写は「自然に対する五分時」と同様、変化する自然を色彩表現しているものが多いが、「自然に対する五分時」のように一日のある瞬間の変化を捉えることより、「湘南雑筆」では季節の移り変わりにむしろ注意を払っている。これは季節の推移に沿ってまとめていることから、蘆花がその点を意識していたと考えてよいだろう。また、多彩な音の抽出も今回は目立つ。このことは「自然に対する五分時」に比べ、より人間との関わりを描いた結果必然的に出てきたものだろう。自然の背後に神を見る姿勢や人生の指針を自然に見出すということも相変わらず見られた。

人物描写では、「写生帳」のように劇的な人生や人間同士の葛藤は書かれていない。人間が自然と戯れたり、自然に恵みを受けたり、自然に癒やされたり、また傲慢な人間に対して自然に反逆され諫められたりするところが描写されている。

⑤ 「風景画家コロオ」

フランスの画家コロオの評伝。自然と共に生き、無欲で高潔な人生を送ったコロオを紹介しながら、その中に蘆花の考える人間の理想のあり方を示した。

「風景画家コロオ」でコロオがどのように描かっていたかという点、以下のように表現していた。「唯一叢の林、然れども朝の林は夕の林」ではない変化する自然に常に注意を払い、自然を愛し、自然に対し謙虚であった。そして一枚の絵をかくために「書きたる下書は殆ど無数」であつて、大家となつても日々研鑽を怠らず努力の人であつた。「一千五百法に衣食し、爾来三十年一銭の多きも食らず。一毫も負債を」つくらず、自分の絵がどれほどの高値で売れたかということにも頓着しない。「世に阿」ず、親を大事にし、「一見老車夫の如く」飾らない人柄で、「貧窮の画家には金を与え、後進の青年には親切の助言を与え」た人。

四、構成から見る作品の意図

荒正氏が「風景画家コロオ」と「灰燼」が「自然と人生」に含まれたことを「全体からみて、異質」であると述べたように、従来「灰燼」と「風景画家コロオ」は「自然と人生」の中で毛色の異なつた作品として、関心が薄かつた。しかし、吉田正信氏が「自然と人生」全体の主眼は、「自然描写というよりは自然と人生との関わり方」にあり、「自然は人生を支配し導く師表的存在として扱われているのである。全体の基調は、人生の基点としての自然の称揚である。」といい、その点から「灰燼」と「風景画家コロオ」

は「異質的」でなく、均整がとれているのではないか。」と指摘^註しているが、首肯すべき意見であろう。

しかし、この二編が他の編とどのような関係にあり、それぞれがどのような意味で配置されたかという点になると、その考察はこれまで十分に行われてきていないように思われる。

巻頭の「灰燼」は、家を守るためには長男以外は犠牲にしてもかまわないという家父長的家族主義が大義名分として通用する見方に対し、その中ではじき出される人々の運命の過酷さに、激しい怒りを表明している。

二番目の「自然に対する五分時」は、刻々と変化する自然美と一体化する清澄な精神が描写されている。ここには、「灰燼」にみられる人間の冷酷さはない。神を信じ、自然と共に生きる精神が描かれている。

三番目の「写生帳」はほぼ人事でまともしている。その中の「可憐児」「海運橋」「国家と個人」は、弱者を犠牲にしても自分の欲望を満足させようとする無慈悲な人間や、貧しいもの、弱い者を無視する金権や国家といった権力を、強く批判している。この点で「灰燼」と共通するものがある。「兄弟」「断崖」などには自然と共に生きる清らかさと反対の強欲や恨みなどが描かれている。「自然に対する五分時」で自然と共に生きる清らかな生き方を描いた後に、再びこ

のような人間や社会の醜悪な姿を挟むことで、読者に反省を迫っているとも考えられる。

四番目の「湘南雑筆」は、自然と人間が一体化し融合しながら存在する様子が、さまざまな場面から描かれている。「自然に対する五分時」は自然を主とし人事を従とした。「写生帳」は人事を主として自然を従とした。「湘南雑筆」は自然と人生の両者を融合させることで、理想的なあり方を描こうとした。この点から「湘南雑筆」を「自然に対する五分時」「写生帳」の最後に置くことで、自然を綴った三部作のまとめの位置づけをしていると考える。

五番目の「風景画家コロオ」は、蘆花が理想とするあり方を理論づけた文章とあっていいだろう。コロオに託して描いた無欲や清廉、人に対する愛情は、「灰燼」「写生帳」で描いた人間の冷酷さ、醜悪さなどまったく逆のものである。この醜い部分と対照させて、人間のあるべき理想的な姿を表現したと見ることが出来る。コロオが自然と一体化した中に喜びを見出す境地は、「湘南雑筆」で見える人間と自然が一体化した中で生きる姿につながっている。

『自然と人生』は、否定すべき人間のあり方、肯定すべき人間のあり方、自然の美しさを描いているが、「灰燼」は私利私欲や家のために家族も犠牲にする冷酷な人間に対し、最後に家が灰燼となることで、そうした人々を否定し、

断罪を下している。蘆花が否定すべき人間のあり方を最初に提示し、それとは全く逆の肯定すべきあり方の「風景画家コロオ」を最後に置いた。そこでコロオが、自然と共に生き、無欲で高潔な人生を送った人物として紹介され、コロオの生き方こそ蘆花の理想とするあり方であることを示した。

このように『自然と人生』は、自然の美しさだけを描いたのではない。自然と人生を並べているように、この二つは切り離せないものとして見ている。名利や富などより、自然の美しさに関心を持ち、そういう自然と共に、無欲で飾らず優しさを持つて生きる姿勢を蘆花は良しとした。だから、巻頭の「灰燼」で最も否定すべき人間のあり方を示し、その後、自然の美しさや人間と自然が一体化した生活をさまたげずに描き、最後にそうした自然と共に生きる最も理想的な人間のあり方を「風景画家コロオ」で示した。つまり、「灰燼」も「風景画家コロオ」も『自然と人生』の中において、まさにあるべき箇所には置かれているといっていいただろう。

全集は昭和二、五年刊行の新潮社版を使用。
引用文の漢字は、新漢字に改めている。

注

- ① 拙稿「自然と人生」の構成について―「灰燼」を中心に―（成蹊國文）第一三三号 昭和五四年二月 成蹊大学日本文学科）
- ・ 拙稿「徳富蘆花『自然と人生』の「自然に対する五分時」について」（成蹊人文研究）第三号 平成七年三月 成蹊大学大学院文学研究科）
- ・ 拙稿「自然と人生」の「寫生帖」について」（成蹊人文研究）第四号 平成八年三月 成蹊大学大学院文学研究科）
- ・ 拙稿「自然と人生」の「湘南雜筆」について」（成蹊人文研究）第五号 平成九年三月 成蹊大学大学院文学研究科）
- ・ 拙稿「自然と人生」の「風景畫家コロオ」について」（成蹊人文研究）第六号 平成一〇年三月 成蹊大学大学院文学研究科）
- ・ 拙稿「自然と人生」の「灰燼」について」（成蹊國文）第三三三号 平成一一年三月 成蹊大学日本文学科）
- ② 二作とも『青蘆集』（明三五）の「兩毛の秋」（1）碓氷（2）妙義に収録。
- ③ 『蘆花全集』第一七卷
- ④ 『日本風景論』（明二七）は地理学者である志賀重昂が、日本国内を實際にまわって観察した結果を、地理学上の見地からまとめたもの。小島烏水は「日本」風景論が出てから、従来の近江八景式や、日本三景式の如き、古典的風景美は一蹴された観がある」（岩波文庫解説）と述べて、その功績を讃えている。
- ⑤ この頃、国木田独歩は佐々木信子との新婚生活（明二八・二九・三〇）、結婚式、蘇峰が媒酌人）を柳屋でおくっていた。蘆花は両親のお供で愛子とともに宿泊していた（明二九・正月）。

その後、蘆花夫妻は明治三〇年一月三日～三三年一〇月四日まで心機一転、赤坂氷川町から逗子柳屋に転居した。柳屋は「もと旅籠屋をして居た頃の屋号なさうな。北に三室、南に二室、八畳がずらりとならんだ家づくりも、旅籠稼業の昔を思はせる。今は主人は専ら農を業とし、八畳五室の母屋は避暑避寒の客に貸して、家族は母屋の東に鍵型につき足した小さな板葺に住み、おかみが荒物屋を出し、酒、酢、味噌、醤油其他くさぐさ売つて居る」(『富士』第二巻第一章(一))。『富士』では柳屋を「あらめ屋」と称している。

⑥「コロオ」の原稿は、刷新された「国民之友」に華々しく掲載される予定であったようだが、手違いで相変らず雑録欄に掲載されてしまった。蘆花は期待していただけに大きなショックを受けたと『富士』第二巻第六章(五)で記している。

⑦⑤の柳屋のこと。

⑧拙稿「徳富蘆花『不如歸』」(『成蹊人文研究』第八号 平成一二年三月 成蹊大学大学院文学研究科)

⑨『蘆花徳富健次郎』第二部(昭和四七年九月二七日 筑摩書房) 二二～二九頁

⑩蘆花の実姉で徳富家の次女。退役軍人山川清房氏と再婚し、広安村安永在住。『富士』の「安永のお時姉」。山川氏は未完に終わった「河島大尉」(『国民之友』明三〇)のモデルといわれている。

⑪荒正人「作家と作品 徳富蘆花」(『日本文学全集六』昭和四九年二月八日 集英社)

⑫吉田正信「自然と人生——その構成と思想性——」(『國語國文學報』第五五集 平成九年三月一七日 愛知教育大学)